

科目名		学科/学年	年度/時期	授業形態
ペーパーペーシエントセミナー		理学療法学科/3年	2021/前期	演習・実技
授業時間	回数	単位数(時間数)	必須・選択	担当教員
90分	15回	2単位(30時間)	必須	中内 英樹
授業の概要				
脳血管障害における病態把握のための評価思考過程を脳画像所見から導き出し、一連の検査項目の選定と実施までの能力を身に着ける。				
授業終了時の到達目標				
事例的疾患に関してその病態の理解、評価、評価の解釈、評価に基づいた治療計画など一連の思考ができる。				
実務経験有無		実務経験内容		
有		理学療法士として5年以上の実務経験 急性期から訪問リハまでの理学療法業務で培った技術を伝える。		
時間外に必要な学修				
次回の予習をする。発表時は前もってプレゼン準備をする。				
回	テーマ	内容		
1	・脳梗塞画像から大脳皮質の動脈支配、主幹動脈と穿通枝動脈の関係、横断面上の脳動脈支配領域を学ぶ。	・脳梗塞のCTとMRI所見・梗塞巣の経時的変化 ・大脳皮質の血管支配と脳深部の栄養血管 ・横断面画像に脳動脈支配神経領域を重ねる。		
2	・脳梗塞の画像所見から閉塞動脈を同定する。 ・脳梗塞の画像所見から出現する障害像を予測する。	・脳画像から閉塞動脈をグループで探究し同定する。 ・閉塞動脈を同定するに至った根拠をグループ発表する。 ・出現する症状を確認する検査項目をグループで探究する。 ・出現する症状を確認する検査項目を発表する。		
3	・脳梗塞CT画像のプレゼン練習 ・脳梗塞の画像所見から出現する障害像を予測する。	・脳画像から閉塞動脈の同定した根拠をプレゼンする。 ・脳画像から出現する症状とそれを確認する検査項目をグループにて探究する。		
4	・脳梗塞の画像所見から出現する障害像を予測し、検査項目をピックアップする。	・脳画像から出現する症状とそれを確認する検査項目をピックアップする。 ・脳画像症例の検査項目のピックアップ根拠について発表する。		
5	・脳梗塞の画像所見から出現する障害像を予測し、検査項目の検査チャートを作成する。	・脳画像から出現する症状を確認する検査項目を整理する。 ・ピックアップした検査項目の検査チャートを作成する。		
6	・作成した検査チャートをもとに実技練習をする。	・作成した検査チャートを基に、実技練習を行う。		
7	・脳出血画像の基礎と経時的変化と圧迫症状を理解する。	・脳出血のCT, MRI所見・圧迫所見 midline shift、頭蓋内圧上昇、カーノハン切痕、鉤ヘルニア		
8	・脳出血の画像所見から出現する障害像を予測し、検査項目の検査チャートを作成する。	・グループで整理した検査項目と検査チャートの作成進捗状況を発表し、検査チャートの作成をすすめる。		
9	・検査チャートを作成し、実技を交えたプレゼン練習をする。	・作成した検査チャートをもとにオリエンテーションと実施実技の練習をする。		
10	・検査戦略をグループごとに発表し、情報を共有する。	・損傷部位→出現が予測される症状→症状確認の検査項目→検査選択の根拠→実施方法の説明→検査結果の記載方法→検査結果の解釈のしかた。		
11	・同一検査項目のグループ担当者により、検査実技発表を行う。	・同一検査項目別で各グループ担当者が実技発表を行う。 ・実施方法の説明→実施上の注意点→実技実施→判断基準説明。		
12	・片麻痺患者の起居動作の介助誘導	・寝返り、起き上がり動作を説明しながら実演する。		
13	・片麻痺患者の車いすトランスファーの介助誘導ができる。	・ベッド⇄車いす間のトランスファーを説明しながら実演する。		
14	・ブロンストロームステージ検査	・ブロンストロームステージの上肢、下肢、手指の検査の練習		
15	・提示症例の検査戦略のまとめ	・損傷部位→出現が予測される症状→症状確認の検査項目→検査選択の根拠→実施方法の説明→検査結果の記載方法→検査結果の解釈のしかたの流れが説明できるようにペアで練習する。		
教科書・教材		評価基準	評価率	その他
・コツさえわかればあなたも読めるリハに役立つ脳画像(メジカルビュー) ・配布資料		実習・実技評価	100%	

科目名		学科/学年	年度/時期	授業形態
臨床実習Ⅰ		理学療法学科/3年	2020/通年	外部実習
授業時間	回数	単位数(時間数)	必須・選択	担当教員
9時間	45回	9単位(405時間)	必須	村上 匡司・坂口 千恵美
授業の概要				
学校が連携している臨床経験3年以上の理学療法士が勤務する医療施設において、臨床実習指導者の指導監督のもと実習を行う。				
授業終了時の到達目標				
<ul style="list-style-type: none"> 実践的スキルを「複雑な障害像を呈しない一般的な疾患に対し、ある程度の助言・指導のもとに理学療法が行えるレベル」まで引き上げる。 認知的スキルのトレーニングを積み重ね、解決策を講じる意思決定過程を指導者とのディスカッションの中からつかみ、知識の構築化を学ぶ。 				
有	村上 匡司：理学療法士として5年以上の実務経験 坂口千恵美：理学療法士として5年以上の実務経験 臨床実習指導者経験を基に、的確に学生をフォローする。			
時間外に必要な学修				
翌日の計画を踏まえ教科書や資料等を参考に事前準備と予習をする				
内 容				
1. 各教育領域における実習内容				
1) 情意領域の実習内容				
<ul style="list-style-type: none"> 学生自らが、能動的に働き、数多くの体験を通じて、対象者の抱える問題を理学療法という手段で解決できることを体感または実感する。 意欲を湧きあがらせ、専門職としての自覚と患者志向の考えを確かなものにする。 				
2) 認知領域の実習内容				
<ul style="list-style-type: none"> 評価実習で経験した認知的スキル(結果の解釈レベル)をさらに積み重ね、解決策(治療計画の意思決定といった情報処理過程を、指導者とのディスカッションの中からつかみ、知識の関連づけと構造化を学ぶ。 認知的スキルを解釈レベルから問題解決レベルへと進める。 				
3) 精神運動領域の実習内容				
<ul style="list-style-type: none"> 評価学で学んだ反射検査、筋緊張検査、感覚検査、協調性検査等を 模倣からコントロールレベルへシフトさせるトレーニングを臨床実習指導者の指示監督下で経験を積む。 				
2. 目標達成のため教育ツールを使用する				
1) 目標達成のため以下の①～④の教育ツールを使用する。				
2) ①～③の教育ツールは、臨床実習指導者に毎日提出しチェックを受ける。				
①Daily Report ②Clinical Record (Type1、Type2) ③自己学習ノート				
④学生中間評価実施表				
教科書・教材		評価基準	評価率	その他
<ul style="list-style-type: none"> 実習の手引き 配布資料 Daily Report 		<ul style="list-style-type: none"> 学生の心得 自己学習ノート Clinical Record 	総括評定	100%

科目名		学科/学年	年度/時期	授業形態
臨床実習Ⅱ		理学療法学科/3年	2020/通年	外部実習
授業時間	回数	単位数(時間数)	必須・選択	担当教員
9時間	45回	9単位(405時間)	必須	村上 匡司・坂口 千恵美
授業の概要				
学校が連携している臨床経験3年以上の理学療法士が勤務する医療施設において、臨床実習指導者の指導監督のもと実習を行う。				
授業終了時の到達目標				
<ul style="list-style-type: none"> 実践的スキルを「複雑な障害像を呈しない一般的な疾患に対し、ある程度の助言・指導のもとに理学療法が行えるレベル」まで引き上げる。 認知的スキルのトレーニングを積み重ね、解決策を講じる意思決定過程を指導者とのディスカッションの中からつかみ、知識の構築化を学ぶ。 				
有	村上 匡司：理学療法士として5年以上の実務経験 坂口千恵美：理学療法士として5年以上の実務経験 臨床実習指導者経験を基に、的確に学生をフォローする。			
時間外に必要な学修				
翌日の計画を踏まえ教科書や資料等を参考に事前準備と予習をする				
内 容				
1. 各教育領域における実習内容				
1) 情意領域の実習内容				
<ul style="list-style-type: none"> 学生自らが、能動的に働き、数多くの体験を通じて、対象者の抱える問題を理学療法という手段で解決できることを体感または実感する。 意欲を湧きあがらせ、専門職としての自覚と患者志向の考えを確かなものにする。 				
2) 認知領域の実習内容				
<ul style="list-style-type: none"> 評価実習で経験した認知的スキル(結果の解釈レベル)をさらに積み重ね、解決策(治療計画の意思決定といった情報処理過程を、指導者とのディスカッションの中からつかみ、知識の関連づけと構造化を学ぶ。 認知的スキルを解釈レベルから問題解決レベルへと進める。 				
3) 精神運動領域の実習内容				
<ul style="list-style-type: none"> 評価学で学んだ反射検査、筋緊張検査、感覚検査、協調性検査等を 模倣からコントロールレベルへシフトさせるトレーニングを臨床実習指導者の指示監督下で経験を積む。 				
2. 目標達成のため教育ツールを使用する				
1) 目標達成のため以下の①～④の教育ツールを使用する。				
2) ①～③の教育ツールは、臨床実習指導者に毎日提出しチェックを受ける。				
①Daily Report ②Clinical Record (Type1、Type2) ③自己学習ノート				
④学生中間評価実施表				
教科書・教材		評価基準	評価率	その他
<ul style="list-style-type: none"> 実習の手引き 配布資料 Daily Report 		<ul style="list-style-type: none"> 学生の心得 自己学習ノート Clinical Record 	総括評定	100%